

源氏物語評釈

花宴

八

第八帖 花宴 評釈

【旧注】花詞を以て名とせり。但巻の詞には「南殿の桜の宴せさせ給ふ」とありて、奥の二条のおとどの藤の宴の所には「藤の花の宴し給ふ」とあれば、是につきて巻の名を「花の宴」といへるにやとおぼえ侍れど、古来花の宴とは桜を翫ぶ事をいひならはし侍るうへ、是は禁中の事也、かれは私の家の宴なれば、猶南殿の桜の宴をもて名目とせりと心得べきなり。

【箋】巻名南殿桜宴事也。則花宴也。

【新桜花の宴をただ花の宴とのみ云につけて、さまざまの説あれど、いふにたらず。いかにとなれば、古今集・春部に、桜の条に、或は詞、或は歌にも、必「桜」と書て、さてちるさくらの歌までを載たり。又諸の花の条には、詞にも歌にも只「花」とのみ有て、さて落る花までを挙てさだかに分たり。さるを、五百年ばかりこのかたの人、いかでよく見ざりにしや。我国には花といへば桜の事也などいふ説のみあり。此説は後の人のならはしをこそいへ、古へにはかなはず。

【玉巻の名、此度の桜の宴の事を、須磨巻・薄雲巻をとめの巻などには、すなはち花の宴と見えたり○源氏君二十歳の春なり。

【釈】此巻の名は、南殿の桜の宴によられたる事、もちろん也。さるを、桜を花といふにつけて、諸抄にさまざまいはれたることあるは、新釈に弁へられたるがごとし。但、新釈の意は、ただいにしへにのみよりて、此物語の比のさまをはおもはれぬいひさま也。此物語の比は、すでにうちまかせて桜花を花とのみもいひたりとおぼしければ、花の宴といはんになでふことかあらん。史にも記録にも皆花宴と見えたるをや。且この

巻の名は既にもいへりごとく、紅葉賀に對へて花・紅葉を並べ挙げられたるなれば、花といはんかた却て穩かなる故にもあるべし。古今集の花の事ははやう契沖ほうしの余材抄にいへりしこと也。

【評】此巻は臘月夜君の事を語るをむねとしたる中に、源氏君の若きみさかりをにぎははしく書なすをせんとせられたりと見えて、時は二月の廿日あまり、所は南殿の桜の花ざかり、日にとく晴て空のけしき鳥の声もこちよげなるに、花の宴せさせ給ひ、詩つくり、あそびして、源氏君、東宮より挿頭花賜はりて春鶯囀を舞給ふなど、いときらきらしくえんににぎははしき盛のさまなり。さて夜ふけてさし出たる有明のおぼろ月夜に、弘徽殿の廊にて右大臣の六君にゆくりなく逢給へるも、えんになまめきたるかぎりの事也。然るを、この女君の事の故によりて、源氏君つひには須磨・明石のかたへさすらへくだり給ふことなれりしは、盛衰のありさまを月花によせて書かすめられたる抑揚の法にて、禍福報応の因縁をにははせたるものとおぼし、此事は惣論にもかつがついへりき。そもそも世中のありさまは、吉事きはまりては必凶き事起り、あしき事極りては又よき事にうつる事、神代より定れるちぎりありて、もろこし人の「糾へる縄の如し」とかいひけんやうなる物なれば、いかばかりやんことなき君たちもかならず通れ給ふまじきことわりをいはんとてこそ、かくたらひにたらひてにぎははしくえんになまめきたるかぎりの中より、遠く禍の出来る伏案をば立られたるならめ。さればにや、花と月とを眼目として、にぎははしきさまをあやなされたる脈見えたり。先「さくらの宴」とかき出られたるより、「日にとくはれて、空のけしき鳥の声も、こちよげなるに」といひて、「春といふもじ給はれり」といひ、「はるばるとくもりなき庭」といひ、春鶯囀・柳花苑など、皆その縁と聞えたり。さて藤壺の御歌に、源氏君の事を「花の姿」とよみ給ひ、

又「月いとあかうさし出てをかしき」といひ、「おぼろ月夜ににる物ぞなき」と打誦じて」といひ、源氏君の歌に「入月のおほろけならぬ」といひ、取かへ給へる扇の画に「さくらの三重がさねにて、こきかたに霞める月をかきて」といひ、それに書つけ給へる歌に「有明の月のゆくへ」といひ、二条のおとどの藤花の宴にもなほ「おくれてさく桜二木」をそへていひ、源氏君の御直衣にも「さくらの唐の綺」といひ、「花のほひもけおされて」といへるなどは、殊にはなばなくにぎははしきをほめたる也。さてつひに臘月夜君にたづねあひ給へる所にも「ほのみし月の影」といひ、かへし歌に「弓張の月なき空」などいへる、何れも皆此脈のほひなる中に、花をば主として月を副たり。こは本巻の名をむねとしたればなるべし。さて此臘月夜の事、つひに紳巻の鳴神の段にいたりて事あらはれ、それより須磨にさすらへ給ひ、はらへの日の雨風のさわぎに其罪やうやうのぞこりて、竟に明石の秋の月に雲霧はれて明らかになりつつ、都にかへりのぼり給ふまで、いと心ふかき伏案ありきと見えたり。そは其巻々に評ずるを見て知るべし。

○此巻は遠く須磨・明石の巻の伏案を思ひ構へられたりと見えて、其おもかげしたににほひたり。そは先巻の初に、弘徽殿女御の藤壺宮に中宮を越られ給へるを、をりふしごとに安からずおぼすよしをかき出られたるは、末にいたりて源氏君の御かたに怨のかかる事の一也。さて源氏君の舞給ふを見て中宮のおもほす事の中に、東宮の女房のあながちににくみ給ふらむもあやしうとあるも、其脈也。其次に、東宮に奉らんとおぼし定めて弘徽殿の御かたにとどめ置給へる臘月夜君にひそかに逢給へるは、あるが中に御うらみの重るべき基を醸したるにて、さかきの巻の鳴神の段にほころばし出たる伏線の端なり。さればつひに此事によりてぞ源氏君は須磨にさすらへ給へる。此脈次の巻々にいたりてやうやう

を殊にすぐれたりとは定むべくもあらず。俊成卿も「殊に艶なる物也」とこそかかれたれ、「殊にすぐれたり」とはのたまはぬをや。かへすがへす意得がたし。

南殿のさくらのえん

〔河〕南殿、桜、紫宸殿。此本殿の巽角にあり。是大略草創よりの樹也。貞観に枯といへども、根より纔に萌出けるを、坂上滝守これをまもる。枝葉再盛云々。下略。

〔湖〕師左近の桜と云、是也。今も紫宸殿の御階ちかくにあり云々。ささき東宮

〔細〕后は藤壺、東宮は朱雀院なり。左右にして

〔細〕南殿の東西なり。東宮は右東なるべし。后は右西なるべし。こうきてんの女御は云々

〔細〕藤壺に立后をこされ給ふを恨み給ひて、同座もなき也。されども今日は参り給ふ也。

〔釈〕かくておはする」とは、后にたち給ひて帝にそひておはするを云。「物見にはえすぐし給はで」とは、同坐もし給ふまじく思しめせど、物見るはゆかしくて、え過さず参り給ふと也。情景さもあるべし。いとよく書とられたり。

日いとはれて

〔細〕前の紅葉賀の日は「日くれかかるほどに、気色ばかり打しぐれて」と有。此花宴には「日いとはよく晴て」とかけり。いづれも時節に相応したる感を思ふべし。

〔釈〕けしきめでたし。細流の御評いとはよく見出給へり。実に紅葉賀と反對の筆法なるべし。

その道のは

〔玉〕上に文学の事見えざるに、「其道」とはいかがなることくなれども、すべて宴には詩を作るをむねとすればかくいへり。

〔玉補〕小櫛に云々とあれど、今思ふに、下の句に「文作り給ふ」と有を、上へめぐらして「其道」といへるなるべし。

たぬるん給はりて

〔細〕韻の字を一字づつ探得て詩を作るなり。各分二字の事也。

〔釈〕この作法、余釈に挙つ。

春といふもじ給はれりと

〔花〕花のえんの詩に春といふ韻の字は、あひにあひたる事也云々。

〔細〕韻字を探得ては、各そのよしを申也。「官姓・名・何々の字を賜る」

となのる也云々。こわづかひ・容儀、心づかひ有べき事と見えたり。

つぎに頭中将

〔玉補〕「人のめうつしもただならず」と中将の心におぼゆべかめれど、それにつけて臆する心もなく、といふ意也。

〔釈〕「めうつし」とは、人の目につく事也。人より目につけて容儀など凡ならずと思ふよし也。

めやすくもしてつめて

〔新〕「めやすく」は、見苦しきに対ふ語にて、見よくしなし給ふをいふ也。「もてしづめて」とは、よくしなし得給ふ也。

〔釈〕「もてしづめて」は、あわつかならず容儀を静にふるまひ給ふ事也。さての人々は

〔釈〕さて其外の人々は、といふ意也。源氏君・頭中将の外の人をいへるなり。おくしがちに

〔花〕「おく」は臆病の心なり。人の臆したる時は、よそへ目がくばられずして、かならず鼻のうへがしろしと見ゆる也。

〔新〕臆すれば鼻白み、心驚けば面赤む也。

〔釈〕晴がましき所にては臆する物也。情景思ふべし。

地下の文人は云々

〔釈〕堂上の人々もはなじろめるが多きに、まして地下の文人どもは、と也。ましでは「はづかしくて」へ係る脈也。「帝東宮の御ざえかしこく云々」とは、そのはづかしき事のよしをここわる例の文法なり。

はるばるとくもりなき庭に云々

〔釈〕「はるばる」とは、広き形容をいへる辞也。「くもりなき庭」は、上に「日いとはよく晴て」とあるをうけて、且あきらけき君の御前なるよしをよせたり。さる御前に立出る事、官位ひきくざえもまた薄ければ、はしたなくて、詩一首作るほどの事はたやすきことなれど、迷惑に思ふ、と也。「やすき事なれど」の注、細流よろし。明星・岷江の説はたがへり。余釈に挙て弁まふべし。としおいたるはかせどもの云々

〔釈〕地下文人の中に、老人の博士どものかたちあやしく見すばらしきは常の事ながら、かく御前へめし出されてこうじたるさまをとりどりあはれに御覧するがをかし、と也。此「をかし」は、感あり興ある意也。さるは、儒者などいふらんものは、そのかみよりかくやつやしきものなりけん。時におくれてかたくなに年老たる、げにいとあはれにもをかしくも有ぬべし。「れいなれたる」とは、貧窶の姿が常住不断となりて見馴たる意なり。

きさらぎの甘日あまり、南殿＊◆のさくらの宴せさせ給ふ。后東宮の御＊

つばね、左右＊にして、まうのぼり給ふ。弘徽殿＊の女御は、中宮＊のか

くておはするを、をりふしごとにやすからずおぼせど、物見にはえ

すぐし給はで、まゐり給ふ。日＊いとはよくはれて、空のけしき鳥のこ

ゑも、心ちよげなるにみこたち上達部カンダチメよりはじめて、そのみちのは、

みな＊◆だんぬん給はりて、ふみつくり給ふ。宰相源氏の中将、春＊といふも

じ給はれり、との給ふ声さへ、れいの人＊にことなり。つぎに頭中将、

人のめうつしもただならずおぼゆべかめれ、ど＊いとめやすくもてし

づめて、こわづかひなど、ものものしくすぐれたり。さての人々は、

みな＊+おくしがちにはなじろめるをほかり。地下＊チゲの文人は、ましてみ

かど東宮帝の、御ざえかしこくすぐれておはします、かかるかたにや

んことなき人、おほく物し給ふころなるに、はづかしくて、はるば

るとくもりなき庭に立いづるほど、はしたなくて、やすき＊◆ほどの事

なれど、くるしげなり。年＊おいたるはかせどもの、なりあやしくや

つれて、れい＊なれたるもあはれに、さまざま御覧するなんをかしか

案どもはさらにいはず

〔花〕花のえんには御遊ばかりにて、舞楽はなし。但、天曆三年三月十一日二条院陽成院の事也。〔花宴〕同月十二日内裏仁寿殿花宴、各有舞楽、即奏。〔春鶯囀〕、又地下の伶人ばかりにて殿上の舞はなき也。この物語のならひ面影もあれば、藍よりも青く書なしたる也。

〔新〕石の説はよし。「鶯のさへつるといふ舞」などいへるもかなへり。さて花宴には探韻などの式も見えぬを、これにはそへし事、其外にも多し。

〔秋〕「どとのへさせ給へり」とは、御用意ありといふ意也。

やうやう入日なるほどに

〔評〕上に「日いとよくはれて」といひ、下に「夜に入て」といひ、又「夜いたうふけて」といへる、首尾の脈なり。

春の鶯さへづると

〔河〕春鶯囀、吉越調、大曲、新案、一名、天長宝寿案。

〔細〕天曆の例なるべし。春鶯囀、花宴にたより有云々。

源氏の御紅葉の賀

〔玉補〕ここにてきるべし。上の詞にゆづりて、舞といふことをはぶきたる也。

〔秋〕此説いかが。御字は賀字へ係る意なるべし。紅葉賀巻に「御かれうびんがの声」とあるに准へて思ふべし。

〔新〕紅葉賀てふこと、ここにみゆ。かくおくて書もまた文なり。

東宮かざし給はせて

〔秋〕東宮、源氏君の紅葉賀の時の舞の事をおぼし出られて、挿頭の花を賜ひてねんごろに御所望します也。「賜はせ」とは、人して令賜給ふ事、「責」とは、通れがたく勧め給ふこと也。

立てのどかに袖かへすところを

〔弄〕源はいづれの舞とも見えず一さし也。

〔岷〕河海には「一かへり」と有。同心なり。

〔新〕これは伶人どもの舞台にて、舞なる春鶯囀の末を殿上にて源はまひ給ふなるべし。さて東宮かざし給はせて舞給ふに、あまりけしきばかりならんもいかが侍らん。「一をれ」とは一疊をいふにや。此案大曲にて、むかしは十四疊有しかいふめれば、それが中に一疊のみはけしきばかりともいひつべきものと、やんことなき仰の侍し也。

〔秋〕この説よろしげ也。弄花・細流などに「何の舞とも見えず」とあるは、いかが。上に「春の鶯さへづるといふまひ、いとおもしろく見ゆる」と

あれは、春鶯囀なること論なきものをや。

左のおとと

〔箋〕ここに初て左府と書り。

うらめしさもわすれて

〔細〕葵上にふさはしからぬを恨むる心あれど、さやうの方をも打わすれ給ふ也。

頭中将いづらおそしとあれば云々

〔細〕紅葉賀の時の源のかたてなれば、何とておそきぞ、とある也。

〔秋〕東宮のたまふなるべし。

柳花苑といふまひを

〔河〕此舞、案図波羅門僧正持来女形也。其姿、如吉祥天女、舞体柔々静々而已云。賜御衣延長例也。

〔細〕此案、上古は舞ありき。今は断絶と云々。

今すこし打過して

〔細〕源よりは念比にまふ也。

〔花〕久しくまふ也。箋同

〔秋〕「打過して」は、右の二義をかねたり。河海に「舞体柔々静々」とあれば、いとしづかに舞給ふ也。故に念比にも久しくも有べし。「かかる事もやと云々」は、若かやうに御所望の事もあらんと、かねて用意して手のかぎり考へてならし置給ふこと也。語脈点のごとし。

御そたまはりて

〔花〕花宴の日、殿上の舞又勅禄を給ふ事など、めづらしき例也。

〔湖〕師河海に延喜・延長の花宴に御衣を賜ふ例はあれども、堂上の舞たる故にはあらざる也。

〔箋〕源氏に舞を所望は、臨時の処分なり。紅葉賀のかた手なれば、頭中将にもならべて御所望也。然間、各やむ事を得ずして次第に上達部に及べりと見えたり。かねて期せざる事也。花宴に堂上の舞其例未だなき故に、如此臨時の体に書なすなるべし。

〔秋〕「みだれて」とは、入乱れて次第なく舞給ふなるべし。「夜に入ては、殊にけぢめも見えず」とは、火影などにては上手下手のけぢめも別段に見えぬ、となり。

ふみなどかうずるにも

〔花〕詩を披講する時には、庭中にたてたる文台をかきて御前にたてて、文人どもは階下にすみて講頌するなり。

〔秋〕このふみは詩の事也。花鳥本にはやがて「詩どもかうするに、とありかうじもえやらず

〔秋〕「かうじもえやらず」とは、文人ども披講しもえせすといふ意也。又一本に「かうしもえよみやらで」とあるは、孟津・湖月などのごとく、講師もえ読やらずといふ義也。されどこれは宗祇が私に改めたるよし、岷江入楚に論あれば、今はとらず。其よしは余釈にいへるを見るべし。

句にとすじののしる

〔箋〕毎句秀逸なる故に各感するとして、講頌中々事もゆかぬ体也云々。

りける。がくどもなどは、さらにもいはずととのへさせ給へり。や

うやういり日になるほどに、春の鶯さへづるといふまい、いとお

しろくみゆるに、源氏の御紅葉の賀のをり、おぼし出られて、東宮

かざしたまはせて、せちにせめの給はするに、のがれがたくて、た

ちて、のどかに袖かへす所を、一をれけしきばかりまひ給へるに、

似べき物なく見ゆ。左のおとど、うらめしさもわすれて、なみだお

とし給ふ。頭中将いづらをそしとあれば、柳花苑といふまひを、こ

れはいますこし打すぐして、かかることもやと心づかひやしけん、

いとおもしろければ、御そ給はりて、いとめづらしきことに人思へ

り。上達部みなみだれてまひ給へど、夜にいりては、ことにけぢめ

も見えず。ふみなどかうずるにも、源氏の君の御をば、かうじもえ

やらず、くごとにずじののしる。はかせどもの心にも、いみしうお

かうやうのをりにも云々

〔細〕草子地也。桐壺のみかどは何事にも源氏君を光にし給ふよしなり。中宮御めのとまるにつけて云々

〔釈〕藤つば、源氏君に御目のとまりていみじく覚え給ふにつけては、弘徽殿女御のあながちに源氏君を憎み給ふもいかなる心にかとあやしく、又藤つばのみづから源氏君をいみじとおぼえ給ふも心うしと、我と思ひかへし給ふ、と也。「心うし」とは、かのみそか事を思ひ絶んとし給ふに、猶御心にまかせぬやうにて、源氏君をいみじと見給ふが心うき也。かれ「おぼしかへされける」といへり。歌の下句もさる意也。よくよく味はふべし。諸抄いと粗くして弁へがたし。

おほかたに云々

〔玉〕此「大かた」は、源氏君の舞を、密通の事なくてただ大かたの世の人にて見たらば、と也。紅葉賀卷四のひらに「大かたには」とある所にいへるに同じ。考へ合すべし。

〔釈〕歌の心は、大かたの世人にて源氏君の花のごときすがたを見たらば、露ほとも心のおかれて心うしとおぼゆる事はあるまじきに、と也。「花」の縁に「露」といひ、「露」の縁に「おかれ」といふ、おのづからの縁語也。細流、いたくたがへり。引れたる歌もさらにかなはず。

御心のうちなりけん事

〔細〕かやうの御歌は人にかたり給ふべきならねは、御心ひとつにてあるべき物を、と也。草子の地也。

〔釈〕いかでもりにけんとおぼめきたるは、例の物語する人になりていへる語なり。

夜いたうふけて

〔岷〕延長四年花宴御記ニ、「寅二刻ニ入内侍臣退出云々」。

あがれ

〔河〕分散、又云頒。

〔箋〕退散。

〔釈〕分散・退散、共にあたれり。頒は「あがつ」にて、物を分つなれば、自他たがへり。

后東宮かへらせ給ぬれば云々

〔釈〕上文の結末より「月いとあかうさし出て」といひて、夜のふけたるをあらはしたり。三月廿余日の月のけしき思ふべし。

うへの人々も

〔湖〕天子に御番の衆、皆ふししづまる也。

〔釈〕「打やすみて」とあるてもじ、下に係る所なくていかが。

かやうに思ひかけぬほどに

〔釈〕かやうに案外なる時分には然るべき隙のあるものなれば、と也。

かたらふべき戸口ども云々

〔細〕王命婦がつばねなるべし。

〔釈〕「なほあらじに」は「ただはあらじ」といふを体言にしたる語なり。

弘徽殿のほそこの

〔河〕細殿 秘説云、弘徽殿、ほそこのとは、廊の字をよめり。旧記に廂をほそこのと点す。是も其心歟。

〔拾〕和名第十六、唐韻云、廊、音郎、和名保留止乃、殿下、外屋也。万葉第十七には「細殿」とかけり。廊の字の和訓、すなはち此意なり。

三のくち

〔河〕弘徽殿に南北へほそくとほりたる戸あり。是は北より第三にあたる戸也。格子遣戸也。

〔花〕三の字はこゑによむべし。こきでんのほそこのの戸、三あり。第三の間にあたる戸といふ心也。河海にいへる、相違なし。

〔弄〕弘徽殿の東にわたり廊あり。それをほそこのといふ。細殿へ出る所に戸三ッあり。南の第三にあたりくるさしたる戸也。

〔玉〕紫式部日記に、「ほそこのの三の口に入てふしたれば」とあり。これは禁中の事にはあらず。禁中ならでもあるなめり。

女御はうへの御つばねに

〔湖〕弘徽殿は宴はててすぐに御直宿なりし也。

〔釈〕「上の御局」は、帝の御座所近き所にある御さうし也。禁秘御抄のおもふき、藤壺と弘徽殿と二所にかきりてあるさま也。おくのくるる戸もあきて

〔岷〕私云、「おくのくるる戸も」とあれば、三の口の戸とは各別歟。

〔釈〕「くるる戸」とは、戸の上下に板をつけたるひらき戸の事也。河海に「たたき戸とも号する也」とあるは、さる名も有しにや。いふかし。三の口の奥の枢戸也。ここより殿上へかよふなるべし。

世中のあやまちは

〔玉〕世の中の女のあやまちする事のあるも、かやうなるよりおこることぞと、源氏君の心のつき給ふ也。旧注ども、「あやまち」をみづからの事に見て、用なき事多くして意明らかならず。

もへり。^{*}かうやうのをりにも、まづこの君をひかりにし給へれば、^{イれナシ}

みかどもいかでかおろかにおぼされん。^{*}中宮御めのとまるにつけて、^帝

東宮の女御の、あながちににくみ給ふらむも、あやしう、わがかう^{*}

思ふも、心うしとぞ、身づからおぼしかへされける。^{*}

おほかたに花のすがたを見ましかば露も心のおかれましやは。御^{*}

心のうちなりけん事、いかでもりにけん。^{*}夜いたうふけてなんこと^{*}

はてける。^{*}上達部おのおのあがれ、^{*}后東宮かへらせ給ひぬれば、の^{*}

どやかになりぬるに、月いとあかうさし出てをかしきを、源氏の君^{*}

ゑひごこちに見すぐしがたくおぼえ給ひければ、うへの人々もうち^{*}

やすみて、^{*}かやうに思ひかけぬほどに、もしさりぬべきひまもやあ^{*}

る、と藤つばわたりを、わりなうしのびてうかがひありけど、^{*}かた^{*}

らふべき戸ぐちどもさしてければ、打なげきて、⁺なほあらじに、弘^{*}

徽殿のほそどのにたちより給へれば、^{*}三のくちあきたり。女御はう^{*}

への御つばねに、やがてまうのぼり給ひにければ、^{*}人ずくななるけ^{*}

はひなり。^{*}おくのくるる戸もあきて、^{*}人おともせず。かやうにて世^{*}

やをらのほりて

〔釈〕「のぼりて」とは、（スル）枢戸より入て殿の長押ある、其長押の上の一段高き所へのほり給ふ也。下文に「いだき下して」とあるに心をつくべし。「のぞき給ふ」は、殿の内を也。此所、諸抄説なきはいかが。

おぼろ月夜に云々

〔河〕「てりもせずくもりもはてぬ春の夜のおぼろ月夜に」なる物ぞなき。しく物ぞなき伊行尺。

〔余〕大江千里集に、「不晴不暗朦々月」と題有て、右の歌あり。結句「朧月夜ぞめでたかりける」とせり。

〔釈〕新古今集には「しく物ぞなき」とあり。河海の原本には「似る」とせり。こなたさまにくるものか

〔釈〕この物かといふ詞の解（キ）ぎま、甚かたし。ここは傍に記せし訳注のごとき意也。若くるを来ウと訳す時は、くるの上にアツラヘタヤウニなどの語を足して心得べし。旧注いづれも意聞えず。

あなむくつけ

〔釈〕「むくつけ」の意、訳注のごとし。「のたまへど」とかけるは、ここはまだ誰ともしらぬ所なれど、末にて右大臣の御女としらるれば、ひきこしていへる也。此類他にも例ありて、一の文法なり。心得おくべし。ふかきよの云々

〔新〕おぼろ月夜をめでありき給ふは、おのづから我に逢給ふべき契の大かたならねば也、といふを、春の月より「おぼろけ」とはいひかけて、上よりは「八月のおぼろ」といふまでかかれり。万葉に「布留のわき田のほには出ず」などつづけて、例多き事なるを、或説には「おぼろけならぬ」といふまで月の事と思へるは、誤なり。

〔釈〕此新釈、説得られたり。旧注は、いとたどしく聞とりがたし。「ふかき夜のあはれ」とは、上に「夜いたうふけて」と有て、さて「朧月夜に似る物ぞなき」とあるに相照して聞べし。「入る月」といふ事、旧注に論あれど、さまではあらぬ事也。大かたに見るべき也。「契」は、例の宿縁の事也。

やをらいだきおろして

〔玉補〕上に「やをらのほり給ふ」とあるをかへり見るべし云々。

〔新上〕に「やをら上りて」とあるは、おくの長押の上なるべし。依て、かたへの下の間にいだきおろして、さて戸をさしつるといふならん。立

てありしを、居させしにはあらじかし。

〔釈〕長押より庇の間へおろす也。「戸」は、上のくるる戸なるべし。

まろは皆人にゆるされたれば

〔細〕源の自称にはあらず、人にゆるされたと計略にの給ふ也。此人にすまはせじのため也。

〔新〕まだわかき女のほどを見て、おしでの給へり云々。

ただしのびてこそは

〔釈〕ただひそかにしてこそは居給はめ、の意也。

いささかなぐさめけり

〔釈〕源氏君と間定めて女の少しなぐさめたり、と也。光るなどいふ名にめでてなるべし。

なさけなくこはこはしうは

〔湖〕女の心、源になびきたるなり。

ほどなくあけゆけば

〔岷〕春のみじか夜のふけたるさま思ふべし。

あわたたし

〔河〕周章又燦。

さまざまに思ひみだれたり

〔箋〕思ひかけず源に逢給へる事、又は東宮へ参らせんと内々おどこのの給ひし、さやうの事ともなるべし。

なほ名のりし給へ

〔湖〕「猶」といふ字に心を付べし。最前より名のり給へどなたまへど、なのらざる故、今またかやうにの給ふなるべし。

いかでか聞ゆべき云々

〔細〕向後何として申通べきぞ、と也。このまゝ一たびにてやみ給はんとはよもおぼされじ、と源ののたまふ也。

中のあやまちはするぞかし、と思ひて、（キ）やをらのほりてのぞき給ふ。

人はみなねたるべし。いとわかうをかしげなる声の、なべての人と（キ）

は聞えぬ、（キ）おぼろ月夜に」なる物ぞなき、とうちずじて、こなたざ（キ）

まにはくるものか。いとうれしくて、ふと袖をとらへ給ふ。女おそ（キ）

ろしと思へるけしきにて、あなむくつけ。こはたぞ、との給へど、（キ）

何かうとましきとて

ふかきよのあはれをしるもいる月のおぼろけならぬちぎりとぞお（キ）

もふ。とて、やをらいだきおろして、とはおしたてつ。あさましき（キ）

にあきれたるさま、いとなつかしうをかしげなり。わななくわなな（キ）

く、ここに人の、のたまへど、まろはみな人にゆるされたれば、（キ）

めしよせたりとも、なでふ事かあらん。ただしのびてこそは、との（キ）

給ふこそゑに、この君なりけり、と聞さだめて、いささかなぐさめけり。（キ）

わびしと思へるものから、なさけなくこはこはしうは見えじ、とお（キ）

もへり。ゑひごこちやれいならさりけむ、ゆるさん事はくちをしき（キ）

に、女もわかうたをやぎて、つよき心もえしらぬなるべし。らうた（キ）

しと見給ふに、ほどなくあけゆけば、こころあわたたし。女はまし（キ）

てきまざまに思ひみだれたるけしきなり。なほなのりし給へ。いか（キ）

でか聞ゆべき。かうてやみなんととは、さりともおぼされじ、などの（キ）

たまへば、

うき身世に云々

〔新身の消るまでをいふも女ひとへに思ふさま也。「草の原」とは墓の事にて、其消て後の世をいふ。然れば「草の原をばとはじとや思ふ」とは、我は今よりひとへに思ひたのむ物を、君は後の世までの契にはあらでかりそめの此世のすさび也けり、ふかくおぼさず、尋ね入べきやうもあらんを、名のらずはいかで聞えんなどの給ふよ、と恨むる也云々。

〔箋しきりに名を尋ねらるるにて、志のふかからぬはしられたる也。其故は、真実の志ならはなき跡までも尋らるべき也、今にかぎるべき事は、と也。名譽の作者也。

聞えたがへたるもじかな

〔玉「もじかな」は「文字かな」にて、詞かな、といふこと也。詞を「もじ」といへる例、葵の巻に「今はさるもじいませ給へ。これもあだ也」といふ、詞の事をいへる也。須磨巻にも「わかれといふもじこそ」とあり。さればこども「申しそこなひたる詞哉」といへる也云々。

〔釈「草の原をばとはじとや思ふ」とあるをうけて、げにことわりなり、我々がいひそこねたる詞かな、とて謝し給ふ也。この所、旧注どもえもいはれぬひがことのみにて、論にも足す。

いづれそと云々

〔釈「草の原」といへるを受て「露のやどり」といひ、「露のやどり」より「小篠が原」と転したり。露のやどりに女君の在所をよそへ、篠原の風に人言のさわがしきをたとへたるはもちろん也。さて意は、然らば露のやどりをいづくぞと尋ね入てわかつたん、されども其間にはわけ入る小篠が原に風吹てさわぎもこそせめ、と也。「わけん」といふべきを「わかん」といへるは、女を誰人ぞと分たんといふ意にかけたれば也。故に「いづくそと」といふべきをも「いづれぞと」といへり。心を付べし。旧注どもいと粗くして、歌の心聞えかねたり。又「右大臣と源氏とは御中のよからぬ中なれば」などいはれたる説、すべてひがこと也。ここにてさる事いはん物かは。いといとつきなし。

〔箋露のやどりをともとうしなふべきいはれを陳じたるなり。

わつらはしうおぼす事ならずは

〔細そなたの煩はしくおぼしめさぬことならば、也。

〔釈本居翁云、とかくしてとひよりて、小笹原に風さわぐをも、そなたにわづらはしくおぼさぬ事ならば、何しにこなたはつつみて遠慮いたさ

＊◆女

うき身世にやがてきえなばたづねても草の原をばとはじとや思

コノマヤ

ふ。といふさまえんになまめきたり。ことわりや。聞えたがへたる

源詞

モットモヂヤ
イヒソコナヒ

もじかなとて、

詞

いづれぞと露のやどりをわかんまにこざさがはらに風もこそふ

＊源

け。わづらはしうおぼす事ならずは、なにかつつまん。もしすかい

＊メン
メンドウシウ

＊カク
カクサウゾ

＊若
ダマシ

給ふか、ともいひあへず、人々おきさわぎ、うへの御つぼねに参り

イエイヒ

＊上

＊局

ちがふけしきども、しげくまよへば、いとわりなくて、あふぎばか

タチ
サワゲバ

＊ナサケ
ナク

＊扇

りを、しるしに取かへて出給ひぬ。きりつぼには、人々おほくさぶ

証抛

＊源ノ
御曹司也

＊伺

らひて、おどろきたるもあれば、かかるを、さもたゆみなき御しの

候

＊メサ
マシ

朝力
ヘリ玉フ也

＊タ
エマ

びありきかな、とつきじろひつつ、そらねをぞしあへる。入給ひて、

＊ツキ
アヒ

＊ネタ
フリ

△曹司二

ん、と也。曹入本

もしすかい給ふかと

〔新たばかりいひて、又はあはじの御心にてなりの給はぬにや、と也。

上の御局に参りちがふけしき

〔釈「上の御局」は清涼殿に有。女御はよべより御とのゐなれば、此弘徽殿より人々参りかよふ也。「ちがふ」とは、其かよふ人々の行ちがふさま也。「しげくまよへば」とは、人しげくたちみだれさまよふ也。

扇ばかりをしるしに

〔釈扇を後の証に取かへ給ふ也。「ばかり」といへるは、猶外にもいはまほしき事多けれど、あわたたしき故に扇ばかりを取かへて、といふ意也。花鳥に引れたる東坡が詩は、不用なれば省きつ。

きりつぼには云々

〔釈桐壺は源氏君の御曹司也。前に見えたり。

〔細昨日花宴の後朝なれば、人々多き也。

おどろきたるも

〔細やうやうねさめしたる也。

つきじろひつつ

〔釈人々ひそかに突あひて、知ながらわざと空寝して居る也。

ねいられず

〔釈よべの人の心にかかりて也。

女御の御おとうとたちにこそ

〔岷女をも「おとうと」といふ也。

〔釈弟人の義なり。

まだ世になれぬは

〔釈「世」は男女の中をいへるにて、男せぬ事也。旧注たがへり。

そちの宮

〔孟源氏の御弟也。後に蛸の兵部卿の宮。

すさめぬ

〔河「すさめぬ」とは、不愛也。山たかみ人もすさめぬ桜花云々。大あらしの云々駒もすさめずかる人もなし。是等皆不愛の心也云々。

〔細帯木巻に「右の大臣のいたはりかしづき給ふすみかは、此君も物うくして」とありし人なり。なかなかそれならましかば云々

〔釈其人ならば却て今少しうつくしからん、と也。弄花いみじきひがこと也。新釈に「中々しのびてかよはんに興あらん、と也」といはれたるもわろし。「をかしからまし」とは、かたちの美しき事なるをや。語脈点のごとし。

六は東宮に奉らんと

〔釈〕六の君は東宮へ参り給ふべき人におはすれば、それならばきずのつきたる事、といったはり思す也。

まきはし

〔湖〕五六のまぎれあれば也。

〔岷〕いづれとさだめがたき心なり。

ことかよはすべきさまを

〔釈〕さて絶なんとは女の思はぬけしきなりけるを、いかなる故に文などかよはさんやうを教へざりけん、など思しめすも、かの人に御心のとまる故なるべし、と地より評じたる也。

かうやうなるにつけても

〔釈〕「かうやうなる」とは、かくふと此女君にあひ給ふにつけても也。其意は下の詞にて聞えたり。

かのわたりの有さまの云々

〔玉〕藤壺わたり也。奥にも見えたれども妨なし。

〔新〕是は、初に藤壺わたりをわりなうかがひありけど、かたらふべき戸口もなしといふに對して、弘徽殿のくる戸のあきて、しかも姫君の一人月めでありき給ひしなどを今思ひかへすに、かの藤壺はかくみだりならず、とおぼす也。或説に「ここは葵の方也。藤壺の事は末にあり」といへるはわろし。ここは上に「藤つばわたり」と書しをうけて、同じ度の事故に「かのわたり」と書、下なるは別の事ゆゑにことに「藤壺」とは書たり。

後宴

〔新〕後宴の名目は踏歌にのみ有やうにいふ説は、いささかたくなし。惣て大宴には後宴あるべき事なり。

きのふの事よりも云々

〔細〕きのふは外さま也、内々は猶面白し、と也。「まうのぼり」は、上つばねに参り給ふ也。

かの有明出やしぬらん

〔釈〕有明月夜に逢給ひし女君故に「かの有明」といへり。「出やしぬらん」は、もしいつかたぞへ出ゆき給はんかと也。「出」といひ「空」といへる、共に月の縁語也。花鳥本に「有明の人」とあるは、劣りて聞ゆ。

〔細〕物見に右大臣の女達の参り給ひしが、歸り給ふべしと思ひて、うかがはせ給ふ也。

思ひいたらぬくまなき

〔余〕「思ひいたらぬくまなき良清惟光」とつづけてよむべき也。

〔釈〕何事にも思ひいたらぬ所なく、明らかにさかしきよし也。旧注たがへり。良清の名、ここにはじめて見えたるを、ことわらぬは、例の文法なり。

北のちん

〔花〕中重の北の陣は玄舞門のかたなり。

かねてかくれ立て侍つる車ども云々

〔釈〕此所いとまぎらはし。誤脱あるにや。本ども異同あり。その中一本に「かねてよりかくれ立て、と書たるやよろしからん。『立て』はたててとよみて、車をたてて也。但さては上を「かくし」といふべき語格なれば、猶いかが。もしくは「かくれにたて侍つる」と有しを、にもじを写し脱せるにや。さらば、北の陣より車ども罷り出る、と続く語脈の中に、かねてより物のかくれ所に立て在つる、と車のゆゑをことわる例の文法となりて聞ゆべし。しか物かげのかくれ所にたてたるは、弘徽殿女御の御退出をまつ御供の車なれば也。下に「車三ッばかり侍りつ、といへるがやがて其の御供の車にて、此中にかの有明の君も乗て居給ふべきよしをおもはせたる也。かれ「むね打つぶれ給ふ」とはかかれたる也。とにかくに、^へかくれたちて、といふ方にては、良清・惟光等の隠れ立たる事となりて、「北の陣より」とあるよりの辞にかなはず。又下の「侍つる車ども」とあるにも続かずして、事の意聞えがたし。故にしばらく「かくれ」の下ににもじを補ひて、「立て」とあるを本文にはとれり。猶考ふべし。さて「まかり出る、の下ににもじ有べきを省くは、例の文法なればあやしふべからず。にもじを含めて心得べき也。^へただ今、といふよりは、良清・惟光が参りて申す詞也。

御かたがたの里人

〔釈〕「御かたがた」とは、女御・更衣たちをすべていふ例也。「里人」とは、その御方々の御里がたの人々をいふ也。

四位少将右中弁

〔孟〕右大臣の息たち也。

〔細〕臘月夜の兄弟也。

〔釈〕此人々の御送りしたるによりて、弘徽殿の御退出とは見知たる也。「あがれ」は体言にて、御退散といふ意なり。

けしうはあらぬけはひども

〔釈〕女がたのわろからぬけしきなるが著く見えて、といふ也。

* 六は東宮に奉らん、と心ざし給へるを、いとほしうもあるべいかな。
オキノドクニモ

わづらはしうたづねんほどもまぎらはし。
伊ロイロトシテ

けしきなりつるを、いかなれば、ことかよはすべきさまを、をしへ
△女△
通シカタ
教

ずなりぬらんなど、よろづに思ふも、心のとまるなるべし。かうや
△被女二
草子地
*

うなるにつけても、まづかのわたりの有さまの、こよなうおくまり
藤ツボ也
カクベツニ
奥

たるはや、とありがたう思ひくらべられ給ふ。その日は後宴の事あ
比
*

りて、まぎれくらし給ひつ。さうのことつかうまつり給ふ。きのふ
△ソノコトニ
爭
*

の事よりも、なまめかしうおもしろし。藤つばは、あかつきにまう
△上局△
*

のぼり給ひにけり。かの有明出やしぬらむ、と心も空にて、思ひい
*源心
至

たらぬくまなきよしきよ惟光をつけて、うかがはせ給ひければ、お
隈良清着窺
△帝△
*

まへよりまかで給ひけるほどに、ただ今、北のちんより、かねてよ
御前
△源△
トキ△良清惟光参リテ
良清惟光詞
*
陣
イかねてより
又イかねてか
予

りかくれに立て侍りつる、車どもまかりいづる、御かたがたのさ
ナシ
カデ
タテ
①
△二
方々
里

と人侍りつる中に、四位少将、右中弁など、いそぎいでて、おくり
亭
*
急出
ミオクリ

し侍りつるや、弘徽殿の御あがれならむ、と見給へつる。けしうは
退出
イヒ
*
アシク

あらぬけはひどもしるくて、車みつばかり侍りつ、と聞ゆるにも、
ヤウス
著
三
マウス

むね打つづれ給ふ

●**三**ッばかりの車の中に其人も在なめり、と先おどろかれてよろこび給ふ意也。

いかにしていづれとしらん

●**釈** いかやうにしてか、我あひたる女君はいづれの君ぞとするべき、と也。父おとなど聞て云々

●**細** 右大臣の間給ひて、源をむにとらんなどありては、と也。

●**釈** たどたどしくたづねよりて、もし父大臣など聞つけてことごとくもてなされんもいかが也。女君のありさまをまだよくも見定めぬほどは、さやうにとりなされてはわづらはしかるべし、と也。「ことごとしうもてなされん」とは、げにも細流のごとく、聲にとらんなどの事をさしていふなるべし。

姫君いかにつれづれならん

●**細** 紫上の事也。上の詞に「つくづくとながめふし給へり」とあるにより、姫君の事をも思ひ出給ふなるべし。

●**評** 此二三句をここに挿まれたる、いとめづらし。細流の御評もげによくかなへり。かくて扇の事をへだてて二条院へわたり給へる事を書出られたるなど、いといとめでたし。

かのしるしの扇は云々

●**河** 檜扇の両方の上三枚づつをうすやうにてつつみて、色々の糸にてとちて、末にあはひ結びにむすひたれたる也。

●**花** 桜のうすやう、面白、うらすはう也。

●**岷** こきすはうなるべし。その方に泥霞を引て月を出したるべし。花に「雲」といへる、不審。※花鳥余情に「雲」とあるのは余釈参照。

●**釈** 三重の桜がさねの扇に、金泥にて色こきかたに霞める月をゑがき、下に水をかきて水中に月かげのうつりたるさまをおもしろく画きたる也。ゆるなつかしう

●**弄** 常の物をも故なつかしうもちなしたる、と也。心づかひ見ゆべき事也。

世にしらぬ云々

●**新** 世中にまだおぼえぬ心ちする、といふ也云々。

●**箋** 明はててよりは有明の月の行へはいつくともしられざる也。「まがへ」とは、ゆくへをうしなひたる心也云々。朧月夜誰ともしらず、其人ともわかぬは、たとへば有明の月のゆくへなきがごとし、と也。

●**釈** 新釈「よにしらぬ」の注よろし。其余はわろし。下句は箋よろし。「よにしらぬ」の説はわろし。よきをとりて余りははぶきつ。上二句は残念のかぎりなき意也。「まがへて」は、まぎらかしてといはんがごとし。失ひたる意也。諸抄用なき説とも多し。

かきつけ給ひて

●**箋** かの扇に書付たまふなり。

こしらへんと

●**釈** ほどよくこしらへていひなぐさめんとおぼす也。

をとこの御おしへなれば

●**釈** 源氏君、わが御心のままに教へなさんとかねておぼししにかなふべし、といひて、但男の御教なれば人なれて、をとこ近き事やまじらんと、其かたはうしろめたく御心にかかる、と也。「あかぬ所なう」といふより「後めたけれ」まで、草子地の評也。

御物語

●**釈** 此下、語たらぬこちす。

れいのと

●**細** まへまへはつよく源をしたひ給ふ事、前の巻に見えたり。わりなくは

●**岷** 是ははや紫のおどなく成給ふけぢめを見せて書り。

大殿にはれいの云々

●**岷** 葵上がたへ二条院よりおはしたる也。上に「大殿にも久しうなりにける」とかきて、されど先二条院へかりそめにおはしたる也。前に大殿の事をかけるにふくませて、二条院より大殿へおはしたる事をばかかぬが面白き也。

●**評** 此評よくあたれり。味ひある所也。始紫上の事をにはせ置て、次に扇の事をもて間隔し、さて此段にいたりて先葵上の事よりいひおこしながら、却て二条院へおはしけるよしをいひ、さて後大殿へおはせるは、葵より紫に御心ひかれ給ふ事を文外にひびかせたる也。さてこの巻は、もはら朧月夜君の事をむねとかかれたる中に、大殿と二条院との事を挿みたるは、前後の巻の照応の脈にて、例の法也。

＊**源**
むねうちつづれ給ふ。いかにしていづれとしらん。ちちおとなど父大臣

聞て、ことごとしうもてなされんも、いかにぞや。まだ人のありさま、

よく見さだめぬほどは、わづらはしかるべし。さりともしらであらイテ知

むはた、いとくちをしかるべければ、いかにせまし、とおぼしわづハマタザンネンナル

らひて、つくづくとながめふし給へり『姫君いかにつれづれならむ。アンジ

日ごろになれば、くしてやあらん、とらうたくおぼしやる』かのし屈クタクイ三重ナシ

るしの扇は、さくらのみへがさねにて、こきかたにかすめる月をか濃方

きて、水にうつしたる心ばへ、めなれたれど、ゆるなつかしうもてキドリ

ならしたり。草のはらをば、といひしさまのみ、心にかかり給へば、

＊**源**
世にしらぬ心ちこそすれ有明の月のゆくへを空にまがへて。とか

きつけ給ひておき給へり』おほい殿にも久しうなりにける、とおぼ置葵上ノ方

せど、わか君も心ぐるしければ、こしらへんとおぼして、二条院へ紫

おはしぬ。みるままにいとうつくしげにおひなりて、あいぎやうづミレバミルホド生

き、らうらうしき心ばへいとことなり。あかぬ所なう、我御心のま草子地

まにをしへなさん、とおぼすにかなひぬべし。をとこの御をしへなコウシヤラシイキマヘ格別タラハヌ

れば、すこし人なれたる事やまじらん、と思ふこそうしろめたけヲトコデカイキニカカル

れ。日ごろの御物語、御ことなどをしへくらして出給ふを、れコノアヒタウチ

いの、とくちをしうおぼせど、今はいとうならはされて、わりな△コト三

くはしたひまつはさず『おほい殿には、れいのふともたいめんし給ニハ

よろづおほしめぐらされて

〔新〕或抄、源氏の御心のなぐさみ給はぬから、さまさまの事を思ひ給ふ也。朧月夜・藤つぼなどなるべし。

やはらかにぬるよはなくて

〔河〕ぬき川の 瀬々のやはらたまくら 也波良加耳 奴留与波奈久天 おやさくるつま おやさくる つまは まして留波しも云々 下略 催馬楽・律・貴河

〔新〕此「やはらかにぬる夜はなくて」といふを、葵のもてなしにたとへ給ふ也。

〔釈〕花鳥・箋などに「おやさくるつま」といふまで論ぜられたるは過たる事、細流に弁へられたるがごとし。

明王の御世四代をなん見侍りぬれど

〔新〕伊勢物語に「三代の帝につかうまつりて」といふが如く、年久しく在をいふのみ也。延喜已上四代をいひ、貞信公など思ひよするは例の泥める説なり。

〔釈〕思ひよせたる人は有もすべけれど、そは作者の心のみなれば、しひて論すべきにはあらず。桐壺帝まで四代の朝を左大臣の見給ひし也。明王は字のごとし。

ふみどもきやうさくに

〔拾〕詩文章の秀逸を「驚策」と云、此字なるべし。

〔玉補〕「きやうさく」は「驚策」なるべし。詩文に秀逸の佳句あるを云。上の若菜巻に「わかれどいときやうさくに」とあるなどは、転じたるものと見えたり。

よはひのぶる

〔釈〕物事のいみじきを見聞て、命の延るやうに思ふこと也。今俗に、命ノセンタスルといふ意也。

くはしうしろしめし

〔細〕源のよくしりてめし出し給ふ故と也。

〔釈〕「けなり」とは、ゆゑ也、又しるし也、又云々に依て也、などいふやうなるさまにつかひたる詞にて、例いと多し。

おきなもほとほと

〔玉補〕続日本後紀「承和十二年正月丁巳、天皇召^ヲ尾張^ヲ浜主^ヲ於^ニ清涼殿^ニ前^ニ、令^ニ舞^ニ長寿樂^ヲ。舞畢、浜主即奏^{シテ}和歌^ヲ曰、於^ニ岐那度天^ニ、和飛夜波遠良

無^ム、久^ク左母支毛^ヲ、散^サ可由留登岐爾^ヲ、伊^イ天豆万毘天牟^ヲ。天皇賞歎^シ、左右垂^リ涙^ヲ。賜^リ御衣^ヲ一襲^ヲ、令^ニ罷退^ニ」。この歌の詞もてかける也。源氏君の「まして栄ゆく春に立出させ給へらましかば云々」との給へるも、此歌の詞也と嘉基いへり。

〔釈〕あまりのおもしろさに、この老翁も殆まひ出まほしきこちのせし、と也。

おほやけ事にそしうなる

〔釈〕「そしう」といふ語、とにかくに詳ならず。諸抄の説もただおしあての事のみと聞えたり。余釈に挙て論ずるを見るべし。なると受たるを思ふに、契沖の説のごとく字音とは聞えたり。その字はおもひえず、しうは秀の字などか、いづれにしても、功者に上手なる物の師どもを尋ねられたる事とは聞ゆる也。されば「おほやけごと」とあるも、公事の意にはあらで、桐壺巻に「蔵づかさ・こくさうあんなど、おほやけ事につかうまつれる、おろそかなる事もこそ」とある「大やけ事」の意にて、ただひととほり大やうに、といふ意なるべし。さらではこの文勢聞えがたし。細流に「公方の御用などには出つかへずして云々」とあれども、その意ならばただ「おほやけに」といふべき也。さてこの「大やけ事に」は、「たづねて」へ係る語脈也。

柳花苑なんまことに後代の例とも

〔箋〕頭中将の御衣を給はりし事は御面目のよし被申也。

〔釈案〕、箋の御説よろし。「後代の例とも」と有は、花宴殿上の舞に御衣賜はれる事はこたびが始なれば、これを後世の例とすべし、との意也。諸抄この事をとやかくはいはれたれど、ここに作者のかくことわられたる用意を見おとされたる説にて、いとおろそか也と云べし。これらまことに透聞なき筆にて、作者のさえのほど返す返すも感ずるにあまりあり。

ましてさかゆく春に云々

〔弄〕まして左大臣の舞給はましかば、さかえたる世の面目なるべし、と大やけの御かたになりての給ふ也。

〔釈〕「翁もほとほと舞出ぬべき」とありし御返答也。「さかゆく春」の詞は、げに玉小櫛補遺の説のごとく、尾張^ヲ浜主が歌の詞なるべし。さて「後代の例」といひて「世の面目」といへる、いとよくかけあひて聞えたり。

弁中将など参りあひて

〔新〕二人といふ説よし。「背中おしつつ、とりどりに」などいふは、一人ならぬ事しらる。

せなかおしつつ

〔余〕背を勾欄におしあてて居る也。栄花物語などにあまた見えたり。

〔釈〕欄によりて笛ふくさま也。

はず。つれづれとよろづおほしめぐらされて、さうの御琴まさぐり

〔源〕ツクネントシテ 万事

組

モテアソビモノニ

て、やはらかにぬる夜はなくて、とうたひ給ふ。おとどわたり給

シテ

左大臣

ひて、一日のけうありし事聞え給ふ。ここのよはひにて、めいわ

〔興〕

左大臣詞 許多 略

〔明〕王

うの御世四代をなん見侍ぬれど、このたびのやうに、ふみどもきや

〔リ〕

〔驚〕詩

うさくに、まひがく物の音どもとのほりて、よはひのぶることな

〔策〕

〔楽〕

〔調〕

〔よ〕はひのぶることな イノチノノビル

ん侍らざりつる。みちみちの物の上手どもおほかるころほひ、くは

〔諸〕

〔時〕世 △ナル二

しうしろしめしどとのへさせ給へるげなり。おきなもほとほとまひ

〔舞〕

〔翁〕

舞

出ぬべき心ちなんし侍りし、と聞え給へば、ことにととのへおこな

〔源〕詞

別

エラビ

行

ふ事も侍らず。ただおほやけごとに、そしうなるものの師ともを、

ここかしこにたづねて侍しなり。よろづの事よりも、柳花苑なんま

〔イテ〕ナシ

〔イ〕は

〔イ〕なんナシ

ことにこうだいのれいともなりぬべく見給へしに、ましてさかゆく

〔後〕

〔例〕

〔ま〕してさかゆく

〔榮〕行

春に立出させ給へらましかば、よのめいぼくにや侍らまし、と聞え

△左大臣ノ

給ふ。弁中将などまゐりあひて、こうらん^{勾欄}にせなかおしつつ、とり

〔背〕中

〔押〕

かの有明の君は云々

〔湖〕是より朧月夜の事なり。

〔釈〕「はかなかりし夢」とは、源氏君にはかなく逢給ひし事を、春の夜のみしき夢にとりなしていへる也。

東宮にはう月ばかりと

〔岷〕東宮に参らせ給ふ事、すでに来月となり。

あとはかなくはあらねど

〔釈〕源氏君も尋ね給はんに、右大臣の姫君とはしられたれば、跡なくはあらねども、何れの君ともたしかに知ずして、殊に御中よからぬあたりにかかづらはんもさまあしく、思ひたゆたひ給ふ、と也。

ゆみのけち

〔岷〕仙源抄云、結はつがふて射る心也云々。

〔釈〕此所諸説まちまち也。案に、「弓のけち」といふは一ツのわざにて、

仙源抄のごとく番ひて射る義なるべし。そのわざすとて、上達部・みこたち多くつどへ給ひて、それより直に藤花の宴し給ふ也。「結」を結願の意と見られたる注は、文義にかなはず。又踏歌の後宴の弓結を引れたるも、ここにはかなはず。猶諸抄を挙て余釈に論へり。

藤の花の宴

〔評〕南殿の花宴の照対に右大臣家の藤花宴をあらはし、且藤氏の棠花の盛をよせてかの業平朝臣の〔さく花のかげにかくる人おほみ、とよまれたる故事をとりてあやなされたるなど、いひしらずめでたし。ほかのちりなんとや

〔河〕見る人もなき山ざとのさくら花ほかの散なん後ぞさかまし

余古今集・春上・伊勢。

〔花〕古今歌に「外のちりなん後ぞさかまし」とよめるは、花にいひをしへたる心なれば、歌の詞になき事を、心をとりにかくのごとくかける也云々。

宮たちの御もぎ

〔河〕弘徽殿女御の御はらの宮たち也。

〔弄〕こうきでんの宮たちの御裳着、右大臣家にて有しなり。

〔抄〕御裳着の事は、これより以前にありし事をいふ也。

〔釈〕殿のきらきらしきをいはんための種子なり。

はなばなと物し給ふ殿のやうにて

〔岷〕よろづきらきらしくもて出て、人の目おどろくやうになり。

御子の四位少将

〔箋〕藤大納言の弟、右中弁の兄なり。

わがやどの云々

〔新〕或説に、是をおごりたる歌といふは誤れり。花をほめて宿をばいひくたし、源をばたふとめり。みかどの「したりがほ也」とのたまふは、宿の花をほめたるを御たはふれにの給ふ也。実におごりたらんには、いかて源のおはさんや。

〔釈〕岷江の一義にもかうやうに注せられたり。されども、右大臣の驕り給へるさまをひそかによせたる意はあらんを、あらはさぬは作者の用意なるへし。帝のしたりがほなりやとの給へるに、さるは趣は聞えたり。わざとあめるを

〔釈〕右大臣より、わざわざ御迎に物せられたればとくゆき給へ、と仰らるる也。

女みこたちなども

〔釈〕帝の御子たちをの給へる也。「なべてのやうには思ふまじ」とは、弘徽殿腹の女みこたちは源氏君の御姉妹なれば、源氏をなべての他人のやうには思ひ給ふまじ、との意也。細流・弄花にもかく注せられたれど、これを源氏君への御教訓のやうにあるはわろし。ここはさるむつかしき意にはあらず。玉小櫛に「右大臣の御むすめの事」とあるもわろし。補遺に弁へたるがごとし。

どりに物の音どもしらべあはせてあそび給ふ、いとおもしろし』か^{*}

調

合

の有明の君は、はかなかりし夢をおぼしいでて、いと物なげかしう

チヨットシタ

イイトナシ

歎

ながめ給ふ。東宮には、う月ばかりとおぼしきだめたれば、いとわ

ナ

△参り玉フベシ

りなうおぼしみだれたるを、をとこもたづね給はんに、あとはかな

サケナク

源

タシカナ

くはあらねど、いづれともしらて、ことにゆるし給はぬあたりに、

ラヌテハナケレド

殊

かかづらはむも、人わろく思ひわづらひ給ふに、やよひの廿余日、

ザマワルク

三月

イ余ナシ

右の大殿のゆみのけちに、上達部みこたちおほくつどへ給ひて、や

司

集

ス

がて[＊]藤花のえんし給ふ。花ざかりはすぎにたるを、〔ほかのちりな

グニ

んどやをしへられたりけん、おくれてさく桜二木ぞ、いとおもしろ

教

後

〔

き。あたらしうつくり給へる殿を、みやたちの御裳ぎの日、みがき

新

造

宮

磨

しつらはれたり。^{*}はなばなと物し給ふとののやうにて、なに事も、

＊

ハナヤカニ

フウギ

いまめかしうもてなし給へり。源氏の君にも、一日内にて御たいめ

タウセイフウニ

んのついでに、聞え給ひしかど、おはせねば、^源くちをしう物のはえ

△米玉ハンコトヅ

右大臣

ザンネンニ

映

なし、とおぼして、^{*}御子の四位の少将をたてまつり給ふ。

△御迎ニ

わがやどの花しなべての色ならば何かはさらに君をまたまし。内^源

＊右大臣

ヒトトホリ

アラタメテ

におはするほどにて、うへにそうし給ふ。したりがほなりや、とわ

帝

帝

デカシ

らはせ給ひて、^{*}わざとあめるを、はやう物せよかし。女みこたちな

笑

ワザワザ

疾

ユケ

どもおひいづる所なれば、なべてのやうにはおもふまじきを、など

生

出

ナミナミノ

△右大臣亡

の給はず。御よそひなどひきつくるひ給ひて、いたうくるるほどに、

粧

暮

ジブン

またれてぞ

●**釈**いとよく引つくろひて、右大臣に待るるほどに、遅く出たち給ふ也。けたかく位あるさまなるべし。

さくらのからのきの御直衣

●**花**「からのき」は、地の色は何にても、文はいろいろのいと、もしは
一色にても織たる物也。から織物・二重おり物のことし。唐装束とて着
する事あり。それは下がさね・うへのはかまなど、唐の綺を用る也。「桜
のからのき」は、面しろきからのきに蘇芳のうらをつけたるもの也。

●**新**是は常に桜といふは、おもて白うら紫なるとはことに待るべし。い
かにとなれば、雅亮装束抄に、「上達部などの桜の下がさねとて着るは、
表は唐綾なれども、うらは濃紫に染る也。花のさくらにはあらず云々」
といへり。今「唐の綺の直衣」の「さくら」といふも、これになぞらふ
べきもの也。さて「唐の綺」は、地色と紋の色とはことにて、常にから
おり物といふ類也。且古の直衣には、是を多く用ゐられつらん。うつほ
物語などにも所々に見えたり。

えびぞめの下かさねのしり云々

●**花**「しり」は裾也。裾は衣のすそを云也。西宮記云、「上臈者、直衣（下）
着下襲。随便。不常事云々」。今按、袍に下襲をかさめるをば布袴
といふ。上下用（レ）之事也。直衣布袴は依（レ）時依（レ）人事也。帯は丸靴也。或
は皮帯ともいへり。晴時は着（二）蒔絵野太刀（一）云々。

みな人はうへのきぬなるに

●**箋**各は袍をきる也。袍とは常の装束也。是を位袍（キウ）と云。其位にしたか
ひたる色をきる也。

あざれたるおほきみすがた

●**河**直衣布袴宿老人可（キ）着之由、見（エ）中右記（ニ）。源氏雖（ト）非（スト）宿老（ニ）、依（チ）為（ル）
尊者（一）着（ス）之歟。「おほきみ」は王の字也。古今集にも「かつらきのおほ
きみ」「かねみのおほきみ」などてあり。

●**花**御幸巻に「しどけなき大きみすがた」とあり。しからば「あざれたる」
もしどけなき心にや。常の袍に指貫を着して裾をかくるは、しどけなき
出立ともいふべし。「あざるたる」は「ざれたる」といふも其心たがは
ざるべし。「大きみ」は王の字也。大人のすがたなどいふ心也。又直衣
すがたをすなはち大きみすがたといふ説あり。

●**新**みな人は袍なるに、源一人直衣をなよかに着なしてしり長く引れ
たらむは、もとより大君たちの風は、あざれたるが上にあざれたるなり。

すべてみこたちの風は臣とことなるよし、下の巻どもに書たり。

●**釈**「大きみ」とは、上古は天皇にかぎりて称（イ）奉りしを、後には諸王
の事にまうすやうになれりしは、やうやうに転れる也。ここは弄花に親
王姿のやう也とあるほどの意にて、諸王よりは聊重く聞えたり。さるは
源氏君は帝の御子ながら、既に氏姓を賜ひつれば、みな人と同じく袍を
着給ひてもあるべきを、殊さらに直衣布袴にて打とげざればみたるさまし給へるは、物にかかはらぬ親王などの体也との意なめり。そは花鳥に「直
衣布袴は依（レ）時依（レ）人事也」と見え、河海に「源氏雖（レ）非（レ）宿老（一）、依（レ）為（ル）尊者（一）着（ス）之歟」などあるを思ふに、直衣布袴はさしも官位の式ある体ならず、
時により人がらに依て着るものとおぼしければ、今日の事がら寵ある親王ほどの人のめし給ふべきやうに聞ゆれば也。しか拘（コ）はらぬさまなるを「あ
ざれたる」とはいへるなるべし。「あざれたる」と同じく、俗にシヤレタといふ意也。されば『「大きみ」は王の字也』といひ、又
「大人の姿」といはれたる注どもは、いささかたがふへし。親王も、もとより大君と申し奉るべきもの也。

いつかれいり給へる

●**釈**皆人に敬礼をせられて入給ふ也。「こと也」とは、光る源氏といはれ給ふほど有て、げにも御姿の格別也、との意也。

事さましになん

●**岨**前の詞に「おはせねば、くちをしく物のはえなし、とおぼして」と有。さてかやうにておはしたれば、中々興もさむるほどと、源のさまをほめたる也。
●**評**「事さまし」は、俗言にケイクヅシなどいふ意也。さて此段、御よそひ引つくろひ、またれて入給ふなど、いたく用意し給ふは、かねてより
御中よからぬ所へおはするなれば、殊更に心づかひし給ふなるべし。然るに、それらの事どもによりて、ますます御中あしうなりゆく嫌となるあ
りさまを言の外に匂はされたる筆づかひ、いとめでたし。皆次々の巻の伏案なる事を心得置て読べき也。

ゑひなやめるさまに

●**細**そら酔也。

●**釈**酔たるさまにもてなして、もののまぎれに座を立給ふ也。さるは、かの有明の君におもほす心（ア）あるべし。

しんでんに云々

●**釈**宴ありし所は、母屋の庇か対の屋などなるべし。そこより寢殿のかたへゆき給ふ也。「東の戸口」は、しん殿の東の戸口也。

●**箋**女一、若菜に一品宮と申、是也。女三、前斎院也。葵に斎院に立給ふ。此二人、弘徽殿の御腹なり。

藤はこなたのつまに

●**岨**藤は寢殿の方へちかき也。「藤は」とあれば、桜はあなたにあるか。
袖ぐちなどたうかのをりおぼえて

●**弄**踏歌の時の出し衣などのごとく、ことさらめきたりと、よろしからす思ひ給ふ也。一勘云、袖口とは簾の下より女房のきぬの袖をいたす也。
今の世にも大饗などの晴の儀式の時は出しぎぬあり。又車よりも袖を出すなり。

●**釈**「ふさはし」は相応の字、よく当れり。「ふさはしからぬ」は不相応のよし也。さて前に弓の結の事有。その諸注に、弓の結は必踏歌の後宴
にある事のやうにいはれたる意ならば、作者殊に意有て踏歌の出し衣を引出られたるにもあらんか。考ふべし。

まづ藤壺わたりを

●**評**前の文に「かのわたりの有さまの、こよなう奥まりたるはや、とありし脈をここに再びあらはして、右大臣家の花やぎ過たるを難ぜられたる照
応、いとめでたし。されども、彼は大内の弘徽殿、此は大臣の家なれば、事がら重らずしてよろし。旧注たがへる事ども多し。

またれてぞわたり給ふ。桜（キ）のからのきの御なほし、えびぞめのした（タ）

がさね、しりいとながくひきて、みな人はうへのきぬなるに、あざ（サ）

れたる大君すがたのなまめきたるにて、いつかれ入給へる御さま、（ウ）

げにいとことなり。花のにほひもけおされて、なかなか事さましに（キ）

なん。あそびなどいとおもしろうし給ひて、夜すこしふけゆくほど

に、源氏の君いたうゑひなやめるさまにもてなし給ひて、まぎれた（イ）

ち給ひぬ。しんでんに女一宮女三宮のおはします、ひんがしの戸ぐ（ト）

ちにおはして、よりぬ給へり。藤はこなたのつまにあたりてあれば、

みかうしあげわたして、人々いでゐたり。袖ぐちなど、たうかのを（キ）

りおぼえて、ことさらめきもていでたるを、ふさはしからずと、ま（キ）

づ藤つぼわたりおぼし出らる。なやましきに、いといたうしひられ

わびにて

〔新〕此にては、「去て」を略しいふにて、ここは「託はてて」といふ意となりぬ。

〔釈〕にては、ただ辞也。すべてナニヌネのてにをはは、皆去の意にはあれど、つかひたるうへは必しもしからず。「わび」も託の意にはあらず、ただこまりたる意也。※次の注と入れ替えた。

かげにもかくさせ給はめ

〔花〕伊勢物語の「さく花の下にかくる人おほみ」は、業平、中将の、行平中納言のもとにて、かめにさしたる藤の花をよめるといへり。心は、忠仁、公良房、藤氏のさかえを思ひよそへてよめるよし、詞に見えたり。故に、今二条のおとを忠仁公になすらへて、「かげにこそかくさせ給はめ」と源氏の君のの給へるも、藤の花にかけたる詞なり。

〔釈〕此御説の意、したに有げに覺ゆ。さるは、作者の深き用意ありし事なるべし。さて詞のうへは、酒をしひられて酔こちたへがたし、此御前の物陰にかくさせ給へ、とのたまひて、なほしたには御姉妹の親しきをのたまへる也。こそはといふ辞の勢、しか聞えたるに、「あなわつらはし云々」といふ答の詞、かならずさる趣と聞ゆれば也。心をつくべし。つまどのみすをひきき給へば

〔釈〕東の戸口の所より横に、妻戸口にゆきて簾を引かつき給ふ也。「ひきき」は、湖月抄に「引かつぐ也。内へ入かかれる也」とある、よろしかるべし。「き」は着の意也。

あなわづらはし云々

〔細〕ここにさふらふ女房のいふ也。下ぎまの者こそ親類もどめはすれ、と也。

〔拾〕これは源氏の「かしこけれど云々」とのたまふにこたふる詞なれば、下ぎまの人こそ、やんことなき人のゆかりはもとめてその蔭にかくれて身をよせ侍れ、みづからやんことなき御身にてかくのたまふは、あなわづらはしや、といふ也。「わづらはし」とは、事のかさなりしげきにいふ也。白氏文集に、託の字を「かこつ」とよめり。今の「かこつ」、是也。

〔釈〕「わづらはし」は、脳み困じたる意にて、俗にメンタウナといふ意也。ここは答へいふべき詞にこうじたるを「わづらはし」とはいへる也。おしなべての

〔岷〕ここに弘徽殿のいもうとどももあるべし。

てわびにて侍り。かしこけれど、此おまへにこそは、かげにもかく

〔ハイコウシテ

オンレオホケレド

〔薩

隠

させ給はめとて、つまどのみすをひきき給へば、あなわづらはし。

〔妻戸御簾

〔女房詞

〔アア

〔煩

よからぬ人こそ、やんことなきゆかりはかこち侍るなれ、といふけ

〔良

〔所縁

〔託

〔ヤ

しきを見給ふに、おもおもしろはあらねど、おしなべてのわかうど

〔ウ

〔重々

〔ナミナミ

〔若女房

どもにはあらず、あてにをかしきけはひしるし。空だき物いとけぶ

〔貴

〔ウツクシイ

〔著

〔煙

たうくゆりて、きぬのおとなひいとはなやかにうちふるまひなして、

〔＊

〔ハデニ

〔イうちナシ

心にくくおくまりたるけはひはたちおくれ、いまめかしきことをこ

〔オクユカシキ

〔後

〔タウセイフウナ

〔好

のみたるわたりにて、やんことなき御かたがた物見給ふとて、この

戸ぐちはしめ給へるなるべし。さしもあるまじき事なれど、さすが

〔領

〔サウハ

にをかしうおぼされて、いづれならむ、とむね打つづれて、扇を

〔オモシロウ

〔△カノ有明△

〔＊◆源詞

〔煙

〔釈〕但、此答へいふ人は女房にて、右大臣の御女たちにはあらず。空たきものいとけぶたう

〔細〕此殿のありさまをいふ也。空たき物のさまもけしからぬと也。鈴虫巻にも見ゆ。悉皆人の用意をかける也。

〔釈〕「空たき物」とは、ふせごなどにて物を薰せず、空中にたく故にいふ。「けふたう」は煙痛の意也。

きぬのおとなひいと花やかに

〔釈〕身を動かす衣の音も用意なく、いと高くはらはらと聞ゆるを、「花やかに」といへり。

やんことなき御かたがた物見給ふとて

〔釈〕「御かたがた」は、女宮たちより弘徽殿の御はらからまでにわたりていへる歟。しめは、「我物と領ししむるをいふ也」と余釈にいへる、よろし。物見給はんとて、戸口一ツを領し給ふ也。戸をさしたる事といふ説は、俗言の意にて、いふにもたらず。

さしもあるまじき事なれど

〔湖〕或説、女宮たちもおほし、人しげき所にて、かやうのすき事はあるまじきこと、と也。いづれならんとむね打つづれて

〔釈〕扇のぬしは何れの君ならんとおぼしてたどりより給ふにつけては、いかがあらんと、先ッむねのさわがるる意也。あふぎをとられて云々

〔河〕石川の、こまうどに、おびをとられて、からきくいする云々下略。〔催馬楽ノ詞、紅葉巻ニアリ

〔花〕源氏の君、扇のぬしをしらんためのはかりごと云々、「あふぎをとられて」といひかへ給ふ也。扇のぬしはやがて心得べき故也。新この石川は、河内国石川郡に高麗人を置たればしかいふ也云々。

打おほどけたる声に

〔拾〕俗におどけたる事をいふとは狂言にかかれるをいふ、此転ぜるにや。よりの給へり

〔釈〕戸口の簾際に也。

あやしくもさまかへたる云々

〔花〕いはれをしらぬ人は、うちききて、源氏の君のいひあやまり給へるぞ、とをかしく思ひて、さまかへたるこまうどかな、とどがめたる也。心しらぬにやあらん

〔釈〕かやうに答ふる人は扇の事の意をしらぬにやあらんと察し給ふ也。ただ時々打なげく云々

〔花〕扇をとられたる人ははや聞しりて、打なげくけはひの色にあらはれたるなり云々。〔釈〕打なげくを其人なりとおぼして、そなたによりかかりて几帳こしに手をとらへ給ふ也。

あづさ弓云々

〔花〕弓の結の日なれば、「あづさ弓いるさの山」とはいへり。「ほの見し月」は、有明の影のほそどの戸口を思ひ出したるころ也。

〔釈〕「あづさ弓」は「射^{ハナ}」といひかけたる枕詞、「いるさの山」は但馬^{タマ}国の名所なり。「ほのみし月」は女房のたとへなることはいふも更也。なにゆゑかと

〔玉〕引歌あるべし。なくては聞こえぬ詞なり。

〔釈〕引歌なくとも意は聞えたり。かくまどふは何ゆゑならんと、わざとおぼめて問かけ給ふ也。

おしあてにの給ふを云々

〔釈〕源氏君はおしあてながらそれと聞ゆるやうにの給ふを、内なる女君はおぼえて聞かけ給ふ也。

こころいる云々

〔釈〕「心いる」とは、ふかく其人に心の入る意にて俗にキニイルといふ、是也。「月なき」に「着^{ツキ}なき」をかねたり。「着^{ツキ}なき」とはトリツキノワロキといふ意なるを、こころは俗にトハウモナイといふ意に転して用ゐたり。さて一首の意は、「いるさの山にまどふかな」といふを受て、源氏君の心のふかく入る方ならば、しか着^{ツキ}もなき空に迷ひ給ふべしや、我に心のいる事なき故に、さるトハウモナキ所に迷ひてえたづね給はぬ也、どうらみたる也。「弓張の月」は、下弦の月にて形の弓を張たるやうに見ゆるをいふ。「いる」といひ「空」といへる、みな月の縁なり。旧

注^キ解^キさまあしくて意聞えかたし。

ただそれなり
〔箋〕ほそ殿にての声色ききしり給へれば、此人と知給ふなり。
いとうれしき物から

〔釈〕かの扇をとりかへ給ひし人と聞つけ給ひて、いとうれしきものから、さすがにあたりあたりの人目もあり、しらぬ右大臣家にけふ初めて入給ふなどの事もあれば、憚り給ひて、ただにもえ逢給はぬくちをしきなど千万の思ひを含めのこして結められたる筆つき、例のめでたしともめでたき文なり。さるを、旧注^キどもいづれもいどこごとしくほめられたれど、或はうれしくはあれどもいまだ六^ム君とはたしかにしらぬ心をふくませたりといひ、或はうれしき物から女の身にて人にこそよれ、かろかろしき事やと心に浅々しく思ひ給ふよし也といはれたるなど、すべていか

るかたに、よりかかりて、木丁^{キテ}ごしにてをとらへて、

手 執

あづさゆみいるさの山にまどふかなほのみし月のかげや見ゆる

と。[＊]なにゆゑか、とおしあてにの給ふを、えしのばぬなるべし。

ナニユエデアラウカ

△内ナル女△エコラヘヌ

こころいるかたならませば弓はりのつきなき空にまよはましや

は。といふこゑ、ただそれなり。[＊]いとうれしきものから。

カノ人

がなる説ども也。但しこはいひさしたる所なれば、いはば何ともいはるべけれど、前後の事がら・文の勢^セにふかく心をとどめて味ははば、よく見しらん人はよく見しるべきものぞかし。